■長谷川海太郎(林不忘，牧逸馬，谷譲次)　　小説家。「丹下左膳」シリーズ，犯罪実録物，米国体験物と名使い分け，早世。
はせがわかいたろう
ﾋﾟｱﾉ国産化・1900＝　　新潟県佐渡郡赤泊で，のちにジャーナリストとして活躍する長谷川清(淑夫)の長男に生まれる。
田中正造直訴1901＝ 1歳：函館新聞の主筆となった父に従って一家で函館に移住，

日露戦争始・1904＝ 4歳：のちに画家(地味井平造の変名で推理小説をも書いた)となる弟?(りん)二郎が誕生。
日露戦争終・1905＝ 5歳：
満鉄発足・・1906＝ 6歳：のちにロシア文学者となる次弟濬が誕生。

伊藤博文暗殺1909**＝ 9歳：**のちに作家となる三弟四郎が誕生。

当時の函館は国際色豊かな港町で，また，父から英語を教えられ，海外への憧れを抱き成長，
明治天皇没・1912＝12歳：北海道庁立函館中学校に入学。
徳富蘆花「順礼紀行」を愛読し，
第一次大戦始1914＝14歳：この頃から，石川啄木に傾倒，
21ヶ条要求・1915＝15歳：4年の時には野球の応援団長として活躍，
民本主義・・1916＝16歳：5年生一同が運動部長排斥からストライキを起こし，首謀者とされて卒業試験で落第処分となり，退校して上京し，明治大学専門部法科に入学，
本格政党内閣1918**＝18歳：**卒業後，太平洋航路の香取丸で渡米し，オハイオ州のオベリン大学に入学するが，

大暴落・・・1920＝20歳：退学，様々な職種を転々としながら全米を放浪する。
原敬首相暗殺1921＝21歳：

護憲三派圧勝1924＝24歳：貨物船の船員として南米からオーストラリア，香港を経て，大連に寄港し，そこで下船して鮮経由で帰国。
再度渡米を予定するが，移民法の改正があってアメリカ大使館からビザが降りず，東京で弟の?二郎のいる下宿に住むうち，そこにいた函館時代の友人水谷準の紹介で，
治安維持法・1925＝25歳：**_{新青年}に谷譲次名で「ヤング東郷」「ところどころ」など，滞米中の実体験に基づき，アメリカで生きる日系人単純労働者の生き方をユーモラスに描いた"めりけんじゃっぷ"ものを掲載し始める。続いて{探偵文芸}に林不忘名で時代物「釘抜藤吉捕物覚書」，{探偵趣味}{苦楽}誌などにも発表し始め，**
英語の翻訳研究グループで香取和子と知り合い，
金融恐慌・・1927**＝27歳：**結婚。鎌倉向福寺の一室を借りて新生活を始める。***嶋中雄作に認められて，{中央公論}に「もだん・でかめろん」を連載し，一躍人気作家となる。{サンデー毎日}{女性}などにも作品を発表し，{東京日日新聞}{大阪毎日新聞}に，林不忘の筆名で時代小説「新版大岡政談」(後に「丹下左膳」)の連載を開始。片目片腕のニヒルな剣豪ヒーロー丹下左膳の冒険談はたちまち人気小説となり，**
共産党事件・1928＝28歳：**_連載中に早くも最初の映画化がなされた。帝国キネマ・東亜キネマ・マキノ・プロダクション・日活の4社競作となる過熱ぶりで，中でも日活の伊藤大輔監督の作品は，同年キネマ旬報ベストテン3位になるなど評価も高く，大河内のという独特の台詞回しとともに強い印象を与える。また，翌年にかけて，中央公論社特派員の名目で夫婦でヨーロッパ14か国を訪問し，その旅行記は谷譲次名の「新世界巡礼」として同誌に連載される(単行本は「踊る地平線」)。この時妻和子も{婦人公論}にロンドン，パリの滞在記を掲載している。ロンドン滞在時には古本屋で犯罪者の資料を買い漁り，この時の着想から，**
世界恐慌・・1929＝29歳：***以後4年，{中央公論}に「世界怪奇実話」を牧逸馬名で連載。その後も牧逸馬名では，欧米の犯罪小説，怪奇小説の翻訳・翻案物や海外の怪事件を扱ったノンフィクション，昭和初期の都市風俗小説などを著し，女性読者層にも人気を博し，やがて雪ノ下に新居を構え"からかね御殿"と呼ばれるほどになる。**
海軍軍縮条約1930＝30歳：{毎日新聞}には以後3年の部長待遇の契約だったが，城戸会長の辞任騒動に追従し，連載中だった丹下左膳の続編は{読売新聞}に連載。
満州事変・・1931＝31歳：
国際連盟脱退1933＝33歳：新潮社から**_「一人三人全集」全16巻を刊行開始。**
帝人疑獄事件1934＝34歳：鎌倉に新居を構える。この年には{東京日日新聞}の朝刊に「新しき天」，夕刊に「丹下左膳」を同時連載。**_{講談倶楽部}でも，現代もの「悲恋華」を牧逸馬名で連載始め，**
芥川直木賞始1935＝35歳：***並行して，時代もの「四季咲お美乃」を林不忘名で連載を始め，なお，谷譲次名「新巌窟王」，林不忘名「時雨伝八」「蛇の目定九郎」「白梅紅梅」，牧逸馬名「大いなる朝」「虹の故郷」「双心臓」が連載中のなか，鎌倉の自宅で，持病の喘息の発作で，急逝した。**

インターネットWikipedia,